龍谷大学仏教文化研究所創設五十周年記念講演会

「仏教の未来」

講演（一）
未来における仏教の所在を問う　―地方仏教とグローバル仏教との間主観性―
マーク・ブラム氏（ニューヨーク州立大学アルバニー校東アジア研究学部教授）

講演（二）
中世知識人の文学　―『海道記』の一端―
三角洋一氏（東京大学大学院総合文化研究科教授）

講演（三）
現代とのつながり　―心を見つめ心をみがく―
蓑輪顕量氏（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

開催日　二〇一一年七月八日（金）
会　場　大宮学舎　清和館三階ホール

司会（那須英勝　仏教文化研究所運営委員・文学部教授）
本日はお忙しい中、龍谷大学仏教文化研究所創設五十周年記念講演会におこしいただきまして、誠にありがとうございます。講演会に先立ち

まして、龍谷大学長　赤松徹眞よりご挨拶を申し上げます。

龍谷大学長　**赤松徹眞**

本日、仏教文化研究所創設五十周年記念講演会に、たくさんの皆様方がご参集いただきまして開催できますこと、ありがたく思っております。仏教文化研究所は一九六一年に親鸞聖人七〇〇回大遠忌法要の記念事業の一つとして開設されました。同じく五十年前、深草学舎で経済学部を開設いたしました。ところで本学は一六三九年に本願寺の「学寮」、僧侶養成の機関として発足して以来、本年で三七二年の歴史を有しております。その間、三百数十年にわたって文系を中心とした学術研究・教育を積み重ねてきましたが、一九六〇年代の日本社会の産業化のもとでの人間育成という課題を受けて、本学は総合大学への展開を図ってきたところでございます。今年、深草学舎に政策学部、政策学研究科を開設して、八学部、九研究科、一短期大学部、一専門職大学院、そして約二万人の学生、院生が学び、研究する大学として歩んでおります。本学は親鸞聖人の精神を建学の精神としております。この仏教文化研究所の役割、使命も、仏教の基礎的かつ総合的な研究を通して、日本の社会並びに世界への研究成果を発信していくことが、この研究所の大きな役割となっております。本年、研究所におきましては十三プロジェクト、研究員は二二四名で、多岐にわたる研究に取り組んでおります。

ところで、日本の社会は三月十一日の東日本大震災後の社会のあり方をめぐって、さまざまな観点から議論が積み重ねられております。そういう中で仏教の果たす役割、日本の社会、今日の文明社会のあり方について、仏教の総合的な研究を通して一定の発言、貢献することが期待されています。本学では十年間にわたる第五次長期計画に取り組んでおりまして、五年間の中期計画の第一期として、二年目を迎えています。その研究の領域の中では、仏教を基軸とした研究の進展を掲げておりますので、仏教文化研究所に、その重要な拠点としての役割、期待が注がれています。

本日は三人の先生方のご講演をいただいて、五十周年記念講演会を開催させていただきます。各先生のご講演を聴かせていただきながら、仏教文化研究所の五十周年をお祝いを申し上げたいと思います。一言、ご挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

司会　ありがとうございました。引き続き、龍谷大学仏教文化研究所長 中川修より記念講演会の開会のご挨拶を申し上げます。

仏教文化研究所長　**中川　修**

龍谷大学仏教文化研究所創設五十周年記念講演会にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

龍谷大学仏教文化研究所は親鸞聖人七百回大遠忌記念事業の一環として一九六一年（昭和三十六）に設立されました。その目的とするところは、仏教を中心に広く文化一般の綜合的研究を推進することと、併せてそのための研究者を養成することにありました。爾来五十年、歴代所長のもと、職員の協力を得て、研究員により共同・常設・特別・個人研究がなされ、その一部は『仏教文化研究所紀要』・龍谷大学善本叢書・仏典翻訳シリーズなどとなって刊行をみてきました。また国内外の著名な研究者や若手研究者によるセミナー・講演会・研究談話会などがもたれ、研究者のみならず数多くの一般市民の参加も得て参りました。

本研究所が設立されて以降、龍谷大学は時代の要請に応じて学部が増え、研究領域の幅が広がりました。幅には中心があるものですが、本学の場合は仏教にあることは申すまでもなく、本研究所の果たすべき役割も小さくないものと言わざるをえません。

昨年来より、佐藤智水前所長もと、運営会議で研究所創設五十周年記念事業について検討を重ねて参りました。その結果、この間の歩みを回顧して反省し、本研究所が今後どの方向に向かうべきかを考える機会にとの願いから、「仏教の未来」とのテーマを掲げ、真宗学・仏教学・日本語日本文学の領域からご専門の先生方のご講演を頂くことを企画いたしました。今回の記念事業を手がかりに、本研究所は、仏教に根ざす人間の生き方である仏教文化に関して、さらなる研究の深化をはかる所存であります。

以上、簡単ではございますが、ご挨拶とさせていただきます。

司会　ありがとうございました。それでは、これより講演会に入ります。